はーとん通（つう）

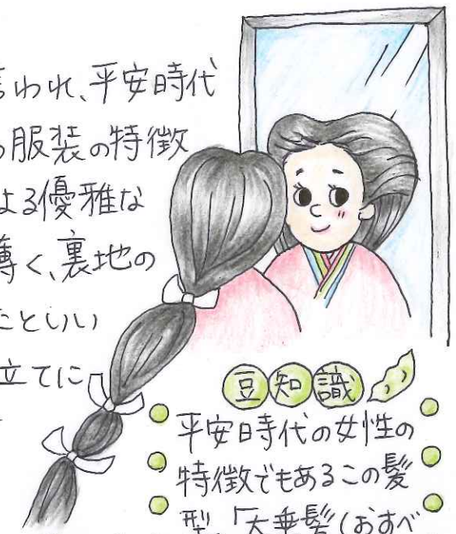
十二単のナゾ編（じゅうにひとえ）

～十二単と京の色彩～

皆さんは、"十二単（じゅうにひとえ）"についてどのくらい知っていますか？「平安時代の貴族の衣装」「着物を重ねて着ている」「色味に意味がある??」など…。正直私にはこの程度の知識しかありませんでした。ですが、詳しく調べてみると、"十二単"ってとっても奥深いんです！なので今回は"十二単"について解説しながら、十二単を語る上でかかせない『京都を彩る色』にも触れていきたいと思います。お部屋でゆっくりくつろぎながらお読み下さいませ！

十二単の基礎知識

奈良時代の後期に着物の原型が生まれたと言われ、平安時代により現代に近い着物が生まれました。この頃の服装の特徴は曲線的なやわらかさと、重ねた色の調和による優雅な服飾美にありました。当時の布（絹）は非常に薄く、裏地の色がよく透ける為、独特の美しい色調が表れたといいます。そして、作りとしてはかなりゆったりとした仕立てになっていたそうです。これは、王朝貴族の生活が座ることを基本の形にしていたためであり、また、湿度が高く蒸し暑い京都の夏（確かに）に理由があるとも言われています。一方で、女房装束について初めて"十二単"という単語で書かれたのが『源盛衰記』という軍記物語だそうです。入水を図ろうとする建礼門院（平清盛の娘ですね！）の衣装について記述された部分で表現されていました。ちなみに、十二単の正式な名称は「五衣唐衣裳（いつつからぎぬも）」です。…五衣!? 五っ???



豆知識

平安時代の女性の特徴でもあるこの髪型。「大垂髪（おすべからし）」と呼ばれ、平安～室町時代頃までこの髪型が中心であったと言われています。こんなに長い髪…当時の女性はさぞ大変だったでしょう…。

ナゾ① 本当に12枚も着ていたのか？

今の時代でもし12枚も服を着てみると…たとえTシャツでも難しそう…。十二単の正式名称を調べたら「五衣唐衣裳（いつつからぎぬも）」。五つの衣…。十二単なんだし12枚着てるんじゃないの!? 調べました。身につけるものとしては、「五衣（いつつぎぬ）」「打衣（うちぎぬ）、表着（うわぎ）」「唐衣（からぎぬ）」＋「裳（も）」「長袴（ながばかま）」で完成です。実際はそんなに着ていません。人や季節によってバラバラだったようで、基本的には先述した数枚を着用していましたが、中には本当に12枚、もしくはそれ以上着ていた猛者もいたようです。

ナゾ② 色あいに意味はあるのか？

皆さんもご存知のように、十二単には様々な色が使われていました。その色にはそれぞれ名称があり、意味がありました。

春：梅重（うめがさね）／萌黄（もえぎ）
夏：葵（あおい）／桔梗（ききょう）
秋：赤朽葉（あかくちば）／黄菊（きぎく）
冬：苔（こけ）／椿（つばき）

季節ごとにも決まった色あいがあり、その季節の象徴的な植物や風景を表しています。現代でも、春夏はさわやかなパステルカラー、秋冬は暖色、といったように季節を表すようなカラーが流行しますが、この平安の時代にも流行があったようですね。

ナゾ③ 何でもかんでも色を組み合わせれば良い？

現代にも負けず劣らずの色の多様さを誇るこの時代ですが、その中でもやはり使ってはいけない色も。それは禁色（きんじき）・忌色（いみじき）と呼ばれ、禁色については、皇族や高位の人物しか使用が許可されていなかったようです。

禁色：黄櫨染（こうろぜん）（天皇の色）／濃赤（こきあか）（上皇の色）／濃紫（こむらさき）（高位の色）
忌色：鈍色（にびいろ）／黒橡（くろつるばみ）

平安の頃から慶事の際にはこういった暗い色が使われていたんですゆ

十二単って、とっても奥が深いものだったんですね！ひとつひとつの色に素敵な名前があり、その組み合わせによってまた新しい色あいが生まれる…。ロマンチックだと思いませんか？このあと京都の観光に行かれる方は、このような色彩にも注目してみてはいかがでしょうか？